教育ひょうご

発行所 神戸市中央区中山手通4丁目10－8
兵庫県教職員組合
発行人 兵庫県教職員組合 代表者 森戸卓也
編集人 福山香織
電話 050（3538）2346
1部15円 年定価360円
（組合員の購読料は組合費の中に含む）

2025/2・1
No.2110

・「兵庫の教育をよくする県民署名」提出
・第29回近畿ブロック青年部交流学習会

―― 阪神・淡路大震災30年 児童・生徒、教職員 ――

追悼の夕べ

1月17日、兵教組は（一財）兵庫県学校厚生会との共催で、ラッセホールにおいて「追悼の夕べ」を開催した。ご遺族や関係者約250人（オンライン視聴含む）が参加し、志半ばで無念にも亡くなられた児童・生徒、教職員の方々のご冥福をお祈りするとともに、震災を語り継ぎ、その教訓を生かす教育改革を推進する決意を新たにした。（兵教組ホームページの組合員専用ページに動画を掲載予定）

1・17への思い（抜粋）

森戸卓也中央執行委員長
（一財）兵庫県学校厚生会理事長

志半ばにして犠牲になられた皆さんのご冥福を心からお祈りするとともに、最愛の家族を失い、苦難の30年を生き抜いてこられたご遺族の皆さまに、心からのお見舞いを申し上げる。

震災当時、被災校園は409校11園にのぼった。それぞれで中心となっていた教職員は、次々と退職を迎え、当時子どもだった世代の教職員が現場の中核を担っている。

私たちは、毎年、1月17日に皆さんとここで再会し、阪神・淡路大震災で得た経験や教訓を、震災を経験していない若い教職員にもしっかりと語り継ぎ、予測困難な時代を生き抜くために、子どもを中心にすえた教育の創造的復興にとりくんでいく決意を新たにしている。

昨年も、全国各地で地震、台風や豪雨による災害が発生し、能登半島では元日の地震に続き、9月には記録的な大雨により23もの河川が氾濫し、地震を乗り越えて生活再建へ一歩をふみ出そうとされている方々の生活拠点である仮設住宅へも容赦なく濁流が押し寄せ、甚大な被害に見舞われた。

この間、被災地の教育復興のため、子どもや学校、教職員にかかわる支援の一助になればと、連合や日本教職員組合とともに、カンパ活動の展開、救援ボランティア、水泳指導・補充学習指導ボランティアの派遣など、被災地支援にとりくんできた。

あわせて、東日本大震災・能登半島地震等にともなう被災地から兵庫県内の小・中学校に転入している子どもたちに「図書カード」を贈るとりくみも継続している。

また、兵庫県学校厚生会は、被災地支援として、会員からの義援金、生活用品事業の売り上げの一部を石川県学校生活協同組合を通じて、被災校園支援に寄託した。

阪神・淡路大震災の教訓を日々の教育実践に生かすとりくみについては、初めて「南海トラフ地震臨時情報」が発表される等、大規模災害の発生が想定される中、11月に開催した兵庫県教育研究集会・全体会において震災シンポジウムを開催し、未災地と被災地をつなぐ防災・減災教育をさらに深化・発展させるとともに、これからめざすべき「兵庫の防災・減災教育」について参加者とともに考える機会とすることができた。

あわせて、会場内に防災・減災教育をテーマにした、子どもも大人も一緒に参加できる展示・体験コーナーを12か所設置し、地域の方々とともに学ぶ機会とすることができた。

また30年を機に、被災体験や教訓、子どもへの心のケアの実践をどのように語り継ぐか、避難してきた子どもたちの「受け入れ教育」や防災リテラシーなど、これからの防災教育のあり方について、被災当事者の声、現場教職員や研究者の考察、提言をとりまとめた『いのちの危機を生き抜く 防災教育と心のケアの日常化』を、6月発刊予定としている。

私たち兵庫県教職員組合並びに兵庫県学校厚生会は、「誰一人取り残さない」というSDGsの理念をふまえ、いつの時代にあっても子どもたちが夢や希望を持って成長できるよう寄り添い、防災・減災教育をはじめとする教育実践の深化・発展に、引き続き努力していく。

藤原俊平兵庫県教育長

県教育委員会を代表して、犠牲になられた方々の御霊に、深く哀悼の意を表する。今日の復興は、震災による多くの犠牲の上にあることを決して忘れてはならない。

震災から30年の大きな節目を迎えるにあたり、県では「忘れない」、「伝える」、「活かす」、「備える」、「繋ぐ」を基本コンセプトとした「阪神・淡路大震災30年事業」にとりくんでおり、県教育委員会も震災の記憶を伝え、次世代への記憶の伝承をはかるとともに、想定される巨大災害へ備えるためのとりくみをおこなっている。これからも震災の記憶が風化することを防ぐとともに、その経験や教訓をいかし、主体的に判断して実践する力、助け合いの心やボランティア精神等の共生の心を育成する「兵庫の防災教育」を推進し、いつの時代であっても変わらない不易な教育として、全力でとりくんでいく。

現在、防災教育副読本「明日に生きる」の改訂を順次すすめている。昨年3月には小学校低学年用のデジタルブックが完成し、この3月には高学年用が完成する予定である。デジタル化された新しい副読本では、音声や映像教材も活用しながら、南海トラフ巨大地震等の新たな災害をはじめさまざまな自然災害に関する内容を学ぶことができる。今後、中学校用・高校用も改訂していき、震災の経験と教訓を引き継ぎながら、より実効性のある防災教育にとりくんでいく。さらに、高校生等防災ジュニアリーダー育成事業では、13年間で1，400人以上のジュニアリーダーを輩出している。本事業は、高校生が率先して防災意識の向上や防災活動をおこなうとともに、災害時には支援者になれるよう、災害に関する知識を身につけ、地域活動や被災地交流等を通して、助け合いの心やボランティア精神等、共生の心を育んでいる。兵庫に防災文化を根づかせ、自分の命や周りの人の命を守ることのできる人材を育成していく。

県教育委員会では、阪神・淡路大震災の経験と教訓を継承し、全国からいただいた多くのご支援に報いるため、災害発生時に教育復興を支援する「震災・学校支援チーム（EARTH）」を2000年に立ち上げた。この間、東日本大震災をはじめ、熊本、岡山、北海道などの被災地にいち早く駆けつけ、学校における避難所運営や学校教育の早期再開への支援、児童生徒・教職員の心のケアにとりくんできた。また、昨年の能登半島地震においては、延べ103人の教職員を現地に派遣し、カウンターパートである珠洲市で避難所となっている学校の避難所運営や学校再開にむけた校務の整理、心のケア、子どもたちの登下校の見守りをおこなった。さらに昨年7月には、各学校の課題に応じたきめ細やかな支援もおこなった。

他府県でも本県のとりくみをふまえ、既に熊本、宮城、岡山、三重においてEARTHと同様の支援チームが発足しているが、国においても、被災地の学校を支援する教職員等の派遣枠組み「D－EST」の構築にむけた検討がすすめられている。まさに本県の先導的なとりくみが国を動かしており、大変誇りに感じるとともに実効性ある枠組みとなることを期待する。EARTH員をはじめ現場の教職員におかれては、県内外において平時、災害時を問わず、各学校における防災教育の実施や講演・研修活動など、日々使命感を持って活動にご尽力いただいていることに、心より感謝の意を表する。

日本はこれまで多くの地震災害に見舞われている。昨年8月には、日向灘地震が発生し、それに起因する「南海トラフ地震臨時情報」が初めて発表されるなど、引き続き発生確率の高い巨大地震に対する十分な備えが必要である。また、風水害などの自然災害が毎年のように発生しており、日ごろからの防災意識を高めることが重要である。

私たちは、震災の経験と教訓を「風化させない」こと、今後起こりうる災害に対して「備える」こと、そしてそのことを「繋いでいく」ことの重要性を認識している。これからも、子どもたちの命と健康を守るために、多くの知恵を出し合い、力を合わせてとりくんでいく。

語り

高井 千珠さん（西宮）

1995年1月14日、夫と1歳半の男女の双子の子どもたちと、山口県の自宅から西宮市の私の実家にむかった。16日の夜、次の日仕事があるため夫だけが自宅に戻り、次の日、阪神・淡路大震災が起こった。

築70年ほどの木造の実家は大きな揺れで一瞬にして倒壊し、私と子どもたちと母は生き埋めになった。息子だけが、タンスの下敷きなり亡くなった。息子の命を奪ったタンスが支えになり、私は生き残ってしまった。

神戸から離れた山口県の自宅では、「被災地」の悲しみを共有できない孤独や、息子を失った悲しみなどが入り混じった暗闇の中で過ごした。1か月が経った頃から、息子の記憶が消えてしまいそうで不安になった。そんな時に子どもを亡くした親の会に出会い、「息子の想いを記録する」ために文集に想いを綴った。最初は辛かったが、想いを綴ることで混乱している想いを整理できるということを知った。

その後「息子の生きた証を残す」ことが、生きる目的の一つとなった。2000年に息子と地震のことを娘に伝え残したいと作った「将君のホームページ」を、授業で使ってくださった学校との交流も始まり、それが生きる希望と支えになった。

1歳半だった娘は、「姿の見えないきょうだい」や「母の悲しみ」をどんな気持ちで受け止めてきたのだろう。小学校1年生の時、「私と将君どちらが死んだほうがよかった？」と聞いてきた。幼い娘の心に傷を作っていたことを知り、あなたのことが大切だよという想いを伝えるため、「ゆうへ 生きていてくれてありがとう」を出版し、中学校の道徳の教科書にも採用された。

夫とは17日14時頃連絡がとれ、電話で息子が亡くなったことを伝えた。葬儀の時「パパの代わりにママと優ちゃんを守ってくれた将君を誇りに思う」と挨拶した。夫は多くを語らないが、自分がその場にいなかったから助けられなかったのではと苦しみ、父親として息子の成長を見ることができなかったことを悲しんでいる。夫は私と私の両親を一度も責めたことがない。実家で家族の命を失う苦しみが、子どもを失った悲しみに加わった。

息子を失ってから、悲しむこと苦しむことが息子を思う方法だと思い、一生苦しんで生きなければと思っていた。娘の成長に息子の成長を重ね泣いていると、娘が心配する様子を見て、息子が「僕が死んでしまったからママの人生、辛い人生にしてしまったね。ごめんね」と思っているのではと感じ、息子が自分を責めないように「笑顔で生きよう」と思った。今では、「息子を思い笑顔で生きる」ことも息子を想う方法であると思えるようになった。

東日本大震災は、「あの日」に私を連れ戻した。被災された方のために何ができるのかを考え、同じ体験をした人たちが、いつか目にしてくれたらという思いで、息子を失った当時を振り返りブログを書いた。ブログを通じて、津波で幼い子どもを失った方と知り合った。息子の二十歳のお祝いに、その方と2人の子どもたちの想いを綴った絵本を作った。そして、臼井真さんにお願いをして、息子への想いを綴った歌「笑顔の向こうに」を作っていただいた。ブログで知りあった彼女との交流や絵本作りは、それまでの自分を振り返る機会になった。

あの日から30年が経ち、息子に会える日が30年近づき、娘と過ごす時間は30年短くなった。これから私が娘のためにできることは、自分の人生を楽しく心から笑顔で過ごすこと。大人になった息子もそんなママを見て、ほっとしてくれていると思う。笑顔で過ごせるようになったことは、私を心配し寄り添ってくれたすべての人たちへの恩返しになるのかなと思う。

息子は、たった1年6か月しか人生を送ることができなかった。今日、息子がこの世に存在していた「生きた証」を話す機会をいただき感謝している。

★URLより閲覧できます

日本災害復興学会　学会誌12号　阪神・淡路大震災の復興20年～被災地の復興と残された課題～「息子を亡くした母親として、いま思うこと　高井　千珠」

二次元コードより視聴できます↓

高井さん出演「J：COMサステナビリティ活動 震災アーカイブ『未来へつなぐ語り部の声 ～阪神・淡路大震災編～』」

★ https://f-gakkai.net/wp-content/uploads/2020/09/12-1-6_Takai.pdf

すべての子どもたちに学習権の保障を！

「兵庫の教育をよくする県民署名」を提出

兵教組は、「ゆたかな教育の創造をめざす兵庫県民会議（略称　教育創造県民会議）」とともに「兵庫の教育をよくする県民署名」にとりくみ、集まった205,827筆の署名を県教委に提出し、要請行動をおこなった。

教育をよくするための要請行動

村田教育次長に署名を手交する出石事務局次長

「教育創造県民会議」は、地域・家庭・学校が一体となって相互に連携し、「21世紀のゆたかな教育の創造」にむけ地域の保護者・労働者・教職員・県民が連帯を深めながら、家庭や地域の教育力の活性化と子どもたちの人間的な成長をめざしている。

子ども、教育を取り巻く環境が大きく変わる中、いじめの認知件数や不登校の子どもの増加、不安定で複雑な家庭環境等による貧困、虐待、ヤングケアラーの問題など、子どもを取り巻く厳しい状況が顕在化しており、早急な対応がもとめられている。すべての子どもの安全・安心な生活と学習権を保障するためには、教職員未配置問題の早急な解消、少人数学級の早期実現、施設等の環境整備、就学援助制度の改善・拡充等が必要である。

そのような状況の中、1月14日、県教委に教育条件整備の充実への思いが込められた県民署名（205,827筆）を提出し、兵庫の教育をよくするための要請行動をおこなった。

趣旨説明の後、①教職員定数の改善や教育予算の拡充、②スクール・サポート・スタッフの各市町すべての学校への配置、③児童生徒支援加配、生徒指導担当教員など、人的支援措置の継続・拡充や人材確保、④学校の避難所としての防災等機能強化および安全・安心な教育環境の実現にむけて、学校施設のユニバーサルデザインの採用やバリアフリー化、体育館への空調設置等に必要な予算を措置すること、⑤すべての子どもたちに高校教育を保障し、受験競争の緩和、多様な学びを可能とする魅力ある学校づくりをすすめるとともに、進路に関わる具体的な施策を推進すること、⑥学校園の統廃合について、地域住民の意見を十分に反映し、子どもにとってよりよい教育環境を保障すること等を要請した。

それに対して、村田教育次長は「本日いただいた皆さんのご意見、ご要望を真摯に受けとめ、今後もできる支援がないかを考え、よりよい兵庫の教育の創造につとめていく」と回答した。

回答を受け、松浦事務局長より「日本語指導が必要な子どもたちへのさらなる支援や高校教育に関わる奨学金事業の見直しを積極的におこなうこと、学校園の統廃合と義務教育学校の設立について慎重に検討すること」を改めて強く訴えた。

地域のみなさんにも協力いただいた県民署名のとりくみに感謝するとともに、205,827筆の署名数に表れる思いを熱く受けとめ、今後も兵教組は教育創造県民会議とともに、家庭や地域の教育力の活性化と子どもたちの人間的な成長をめざしてとりくんでいく。

兵庫の教育をよくするための要請書（要旨）

一　子どものゆたかな学びと育ちを保障する教育条件整備のため、早急に教職員の未配置問題を解消すること。また、人材確保にむけ、採用・任用のあり方、働きやすい職場づくり、学校現場を支える人たち等の増員など、持続可能な学校づくりをすすめること。

二　子どもの安全・安心と「学ぶ権利」の保障をはじめ、教育の水準・機会均等を保障する教育予算を拡充すること。

三　いじめの認知件数や不登校の子どもが増加している実態をふまえ、「人権教育基本方針」、「兵庫県人権教育及び啓発に関する総合推進指針」、「外国人児童生徒にかかわる教育指針」の具現化をはかるための予算を拡充すること。

四　兵庫の防災（減災）教育の充実、学校施設の防災等機能強化のための予算措置をおこなうこと。

五　すべての希望する子どもに高校教育を保障し、受験競争の緩和、多様な学びを可能とする魅力ある高校づくりをすすめるとともに、子どもの進路に関わる具体的な施策を推進すること。

六　学校園の統廃合については、地域住民の意見を十分に反映し、子どもにとってよりよい教育環境を保障すること。

七　義務教育学校の設立については、財政抑制や統廃合の観点からの安易な導入とならないよう慎重に検討すること。

第29回近畿ブロック青年部交流学習会

KNB（近ブロ）1泊2日！
和歌山で学びあり、笑いありの2日間

1月11・12日の2日間、和歌山県民文化会館で近畿ブロック（以下、近ブロ）青年部交流学習会が開催された。県内各地域組合や近畿各単組等から参加した青年部員約100人は、近ブロ独自の参加体験型の交流活動や、グループ討議等をおこない、同じ思いを持つ仲間とのつながりを深めた。

1日めの全体講演会では、池田清郎さん（部落解放同盟中央執行委員）による「部落差別とえん罪―『狭山事件』を知っていますか？」と題した講演がおこなわれ、部落差別問題や狭山事件の経緯について、熱く語られた。また、分科会では8つのグループにわかれ、タブレットを使用したアニメーション作成や避難所運営ゲーム、フィールドワーク等をおこない、授業づくりや防災、部落問題について改めて考える機会となった。

2日めの分散会では、各単組でのとりくみや学校園の働き方改革の現状や課題について話し合い、交流を深めた。

全体講演会の様子

分科会（誰でもできるけん玉活用術）の様子

分科会（フィールドワーク）の様子

分散会の様子

近ブロ青年部交流学習会　ねらい

①近畿の青年教職員の仲間が集まり、交流する
②青年部どうしの活動の活性化をはかる
③近ブロからよりゆたかな青年部活動をつくりだし、全国に発信する
④組織拡大・強化をめざし、青年リーダーを育成する
⑤2025年春闘にむけて日教組青年部運動の意思統一をはかる
⑥政策・制度要求実現にむけての意思統一をはかる

要項より

近ブロ青年部交流学習会は、2日間を通して参加者がともに語り合い、職場のさまざまな問題に対して発言できる力をつけていけるよう講座を設定している。〝集まること〟を通して、「今後の教育を担うのは青年なんだ」という思いを互いに共有しながら、「わかる授業・たのしい職場（学校園所）」の実現をめざして、教育労働者としての力量を高め、仲間とのつながりを深めていく。

学校現場の多忙化が解消されない今だからこそ、私たち青年教職員は仲間と集まり、同じ時間を共有し、語り合い、青年部同士のつながりを強めることが必要である。世代交代期の今こそ、先輩教職員とのつながりも大切にし、先輩方の教育や組合活動に対する思いや願いを語り継がなければならない。さらに、青年自らが組織拡大・強化のとりくみに積極的に参画していくとともに、私たちの先輩教職員が協力・協働のもとに育んできた平和・人権・環境・共生教育を自主的・主体的に発展させていく。

○参加者感想より

・なぜ組合が狭山事件に対し、声を上げているのかがわかった。差別にむき合い、正しい知識や価値観を広めていきたい。
・部落問題の歴史的背景や差別の現状について深く考えさせられた。個々の意識改革とともに、教育や地域全体でのとりくみが必要だと感じた。
・分科会で、ICTを用いた図工教材の工夫についてグループの方と楽しみながら学ぶことができた。
・フィールドワークで地区の歩みを知り、刺激を受けた。教職員の立場からできるまちづくり、人づくりについて考えていきたい。
・他府県、他校種の教職員と意見を交えることができる有意義な分散会だった。
・同世代でこんなに志高く日々にむき合っている仲間がいるのだと思うと、自分もがんばろうと思うモチベーションになった。